

彼に圧しかかる重圧

山本高之

「ついに明日か……」

冥王決戦前夜。アルフレッドは、その胸に不安を抱いていた。今までなんとか勝ってきたこの戦いだったが、明日は今までのどの戦いよりも激しく、辛いものになる。そんな戦いの指揮を自分が執れるのか。誰1人欠けることなくこの決戦に勝つことができるのか。アルフレッドは、そのプレッシャーに押しつぶされそうだった。

「俺が、弱気になっちゃダメなのに……クソッ！」

椅子を力任せに蹴り上げた。そんなことをしたのは初めてだった。

コンコン

「誰だ？」

「アタシ。サラよ」

アルフレッドの部屋をノックした人物は、今までアルフレッドを支えてきた1人、サラだった。

「何の用だ？ 今は人に会いたくないんだ」

「お願い。アルに伝えたいことがあるの」

アルフレッドは渋々だが、サラを部屋の中に入れることにした。

「それで、何の用だ？」

「明日の事よ。その感じだと結構参ってるみたいだね」

「なんだ？ 俺をからかいに来たのか？」

サラの態度がアルフレッドは気に食わなかった。

「そういうわけじゃないわ。だから、そんなに怒らないでよ」

サラは笑顔を一切崩さずに、言葉を放った。その笑顔がアルフレッドは気に食わなかった。

「じゃあ、なんだ。労いの言葉でも言いに来てくれたのか？ そんな事だったら明日でもいいだろ」

「だからそんなに、イライラしないでよ。ちょっと待ってて。あともう1人来る予定だから」

「……ヨミか」

「当たり前」

アルフレッドはサラが何をしたいのか全くわからなかった。ヨミまで呼んで、自分に何を伝えたいのか。何をしたいのか。いくら、頭で考えても解は出なかった。

コンコン

「来たわね。今出まーす」

「俺の部屋なんだけど……」

サラはアルフレッドの言葉をスルーして、部屋の扉を開けた。扉の向こうにはサラと同じく、今まで一緒に戦ってきたヨミがいた。

「来てあげたわよ」

「別に俺は来てほしいと頼んだ覚えはないけどな」

「アル！ そんな態度はダメだよ！」

「アルフレッドがそんな態度を取るとはね。サラの言う通りホントに参ってるみたいね」
ヨミまでがサラと同じようなことを言う。

「あなたは一体何に怖がっているのかしら？」

そう見えるのか。誰の目にもそう映ってしまうのか。アルフレッドにはわからない。

「アタシ達じゃ、アルの恐怖心を取り払うことってできないのかな？」

アルフレッドは、何も言えずに、押し黙った。すると、ヨミが言葉を重ねてきた。

「私達、今まで一緒に戦ってきた仲間よね？ まあ、私は元冥王軍だけど。でも、今はあなたの仲間よ？ その仲間に頼って何が悪いの？」

「ヨミの言う通りだよ。アタシの事信頼できない？」

「そんな事は……ない……」

「なら話してよ。アタシもヨミもしっかり受け止めるから」

「打開案もその後に考えてあげるわよ。だから、全部吐いちゃいなさい」

「お前ら……」

2人の言葉を聞いて、アルフレッドは何を1人で悩んでいるのだと思えた。今までの戦いも、彼女達は自分を支えてきてくれたじゃないかと。

冥王軍のタナトスの時だってそうだった。アイツの幻術に苦戦しているときだってサラとヨミは一緒に解決策を考えてくれたじゃないか。

騎士剣霊グラムの時も同じだ。俺の剣術がグラムに全く通じなくて、それでいて、グラムの剣術に圧倒され、諦めかけてた時に、あの2人は俺の心が折れないようにサポートしてくれたじゃないか。

困ったときは仲間を頼る。最終決戦だからって、別に今までとやることは変わらない。サラやヨミ、他の皆だっていつもアルフレッドが悩んでいるときは手を差し伸べてくれていた。それに今さら気づくことになった。

「なんでこんな初歩的なことに気づけなかったんだろうな」

この2人だったら、必ず力になってくれるのに。無駄に肩ひじ張っていたせいで、1番近くにあった答えをアルフレッドは見逃していた。

「どうしたの？ アル？」

「狂気に負けて壊れたのかしら？」

「ヨミは一々毒づかないといられないのかよ。……頼ってもいいか？ 2人の事」

アルフレッドの言葉に、サラとヨミの2人は、1度お互いの顔を見合わせ、もう1度アルフレッドに向き直り最高の笑顔でこう言葉を合わせた。

「もちろんー！」

「ありがとう。最高の仲間を持ったよ。俺は」

「この借りは明日の戦いが終わった後、しっかり返しなさいよね」

「あつ、じゃあ、私も返してもらおうと！」

「お前ら……まあ、いいか。じゃあ、聞いてくれるか？」

そうして、アルフレッドは今抱えている不安を2人に打ち明ける事にした。

「俺は、怖いんだよ。明日の戦い本当に勝てるのか。俺の指揮で誰かの命が失われるんじゃないかって。それがすごく怖いんだ」

隠す事無く、アルフレッドはすべてをサラとヨミに不安を打ち明けた。

「そう言う事ね」

「なんか、アルらしいね」

「なんだよ。なんか悪いかよ」

サラもヨミもなぜか、拍子抜けしたような反応をしていた。

「アルは考え過ぎだよ」

「そうね。私たちが負けると思ってるの？」

「いや、そんな事は無いけど……やっぱり怖いんだよ」

どうしても、アルフレッドは自信が持てなかった。この2人を、今まで戦ってきた仲間を失うんじゃないかと。負けてしまうのではないかと。

「大丈夫よ。私たちは負けない。絶対に生きて帰るんだから」

「そうだよ。アルは今まで通りにやればいいんだよ。そうすればアタシ達は勝てるよ」

「なんで、そう思えるんだ……」

「だって、今までがそうだったんだもん」

「そうよ。あなたは今まで通りでいい。何か変えようとすれば、逆にミスを犯してしまうわよ？」
在り来たりな言葉だったが、アルフレッドの胸にはその言葉すんなりと入ってきた。

こんなにも簡単なことだったのにアルフレッドは難しく考えすぎていた。その考えが段々に意味の無いものだと思えるようになっていた。

「なんか、バカらしくなってきたな」

「元からバカらしい悩みなんだから当然よ」

「ヨミ。そんな事言っちゃダメだよ」

きつと大丈夫だと。アルフレッドはそう思えた。この2人も、他の仲間達も絶対死なない。

そして、明日の戦いは勝てる勝てないじゃない。勝つんだと。

「ありがとう。サラ。ヨミ」

「どういたしました！」

「ふん。手間かけさせるんじゃないわよ」

「相変わらず言葉キツイな。ヨミは」

「「あははは！」」

そうして、3人は部屋の中で笑い合った。

「明日の戦い、絶対勝とうな」

「もちろんだよ！」

「当然ね」

こうして、3人は明日の戦いに勝利することを誓い合った。

※当作品は「Lord of Knights」短編小説募集企画に応募いただき『佳作』を受賞した作品です。